

## 1. 現在の発掘調査状況

10月はA区とB区の調査をおこなっています。A区は縄文時代後期（約4,000年前）の生活面で、たくさんの土器・石器が出土しています（第1図）。

B区は江戸時代（約400年前）と縄文時代後期・晩期（約4,000～2,500年前）の調査が終わりました。



第1図 A区下層（縄文時代後期）作業風景

## 2. 阿賀野市内遺跡出土品展

10月21日土曜日に、阿賀野市内遺跡出土品展を開催しました。市民を中心に子供から大人まで76名の方々が見学に来られました。（第2図）。

展示会場では、土橋北遺跡・村北遺跡・砂田遺跡の3遺跡から出土した遺物を展示しました。みなさんは興味深そうに出土品を眺めたり、疑問に思ったことについて質問の声があがっていました。



第2図 阿賀野市内遺跡出土品展の様子

## 3. アスファルトが付着した石

A区では、アスファルトが付着した石が出土しました（第3図）。石は加工されていない自然のものですが、表裏面の中央に黒い筋状の付着物が見られます。この黒い付着物は天然のアスファルトと考えられます。縄文時代にはアスファルトは主に接着剤として用いられました。

第3図の石は、アスファルトが付いた紐を巻き付け固定したものと考えられ、魚を捕る網のおもりに使用された可能性があります。現在のところ、アスファルトが付着した石は1点です。

近くにある石船戸遺跡では、アスファルトの塊のほか、アスファルト付着土器・石器が多く出土しています。アスファルトは土器の補修に使われたり、矢じりと柄を固定するために用いられたりしています（第4図）。



第3図 アスファルトが付着した礫



第4図 石船戸遺跡出土のアスファルト付着石器

## 4. アスファルトについて

アスファルトは、縄文時代に使用されはじめ、なかでも縄文時代後・晩期にさかんに使われました。アスファルトは加熱すれば柔らかくなり、



加熱を続けると液状になります。冷えて常温にもどると固まる性質をもっています。縄文時代では主として接着剤として使われていたと言われますが、アスファルトには耐水性もあり、防水に適している特徴もあります。こうした水をはじく性質を利用して、縄文時代の人びとは川で魚を捕る際に、第3図の石のように網とおもりをアスファルトで固定したものと考えられます。

では、土橋北遺跡で見つかったアスファルトはどこから持ってきたのでしょうか。アスファルトは原油中のもっとも重い成分であることから、原油の産地付近がその候補になります。阿賀野川左岸では新津油田が有名です。鎌倉新田付近では黒曜石のように光沢のあるアスファルタイトと呼ばれる塊が採取できます（第6・9図）。この付近を流れる小川の川岸は、現在でもアスファルトが貼りついて黒くなっています（第7・9図）。

遺跡から近いところでは、羽黒油田（笹神）や草生水（安田）などがあります。草生水から西へ約600mにある六野瀬付近の断崖では、黒い層が見られます（第8図）。この黒い層は、さわると油っぽくべとべとしています。

#### 4. まとめ

採取した資料を実験的に加熱し、石と柄の部分に接着してみました。アスファルトもアスファルタイトも加熱すると柔らかくなり、簡単に石と柄を接着することができました。使い終わったアスファルトは塊状にしておき、次に使うまで保管していたのかもしれない（第10図）。

アスファルトは秋田県や新潟県などの日本海側に産出地が多く見られます。縄文時代には東日本の太平洋側の遺跡でもアスファルト関連の遺物が多く出土することから、重要な交易品として流通していたものと考えられます。



第6図 鎌倉新田付近の土層断面



第7図 鎌倉新田付近の川



第8図 六野瀬付近の土層断面



第9図 鎌倉新田で採取したアスファルト（右）とアスファルタイト（左）



第10図 加熱後のアスファルト塊